

忘れかけた子ども心が、軽やかに再起動するとき ——《教材分析》佐野洋子『だってだってのおばあさん』（小学校1年生）——

白瀬 浩司

九州女子大学人間科学部人間発達学科

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1（〒807-8586）

（2015年5月29日受付、2015年7月9日受理）

序

人は誰でも、一巡する生涯の中で、子どもから大人になり、やがてまた子どもへと回帰していく。それは心身両面において看取されるところだ。ここでさらに、自他の関係性のうち《保護—被保護》という側面に即しつつ言うならば、生を得て、誰かに庇護される存在は、やがて成長して誰かを護る立場となり、さらなる時を経て再び誰かから保護される存在となる。そして、さほど遠からぬ何時か、誰かに看取られながら終焉のときを迎えるわけである。

また、誰かを護り（教え）育てる営みは、同時に、その誰かから護られ（教えられ）育てられるという双方向的な要素を内包している。今更めいた言い草ではあるが、これは職業としての保育・教育従事者のみならず、何らかのかたちで他者と保育・教育的に関わる体験を有する者なら誰しも首肯しうる実感のはずだ。

本稿では、絵本『だってだってのおばあさん』（佐野洋子 作・絵／フレーベル館、2009年）を教材分析の事例として取り上げることにはしたい。同作品は、平成23年度版の小学校教科書『くくご 一下 ともだち』（光村図書）に教材のひとつとして採択され、現行教科書（平成27年度版）にも引き続き収載されている。

同絵本に登場するのは、小さな家で同居する98歳のお婆さんと5歳の牡猫である。両者は飼い主と飼い猫——仮に人間同士であれば、祖母と孫（あるいは曾祖母と曾孫）の男児——という関係であり、一見するかぎり、《保護—被保護》の配置も明確なものだと言えよう。しかしながら、このお婆さんと牡猫を《子どもへと回帰した存在》と《成長しつつある実際の子ども》という組み合わせとして捉え返すとき、物語は別の様相を呈しはじめる。

第I章において本作品の梗概こうがいと教材としてどのように扱うことが求められてきたのかを確認し、授業実践家による言説を整理する。その上で、第II章では本作品の読解に取り組む際、軸となるお婆さんの変化を把握するために留意すべき作品の表現構造について指摘していく。さらに、もうひとりの登場者である猫の変化・成長の把握が作品の読解に不可欠であることについても論じることとなる。

I. 作品梗概（あらすじ）と、教室での読まれ方（作品享受史の一断面）

(1) 作品梗概

物語の中で明示された時間的な節目にしたがい、本作品を便宜的に3つのブロック——お婆さんの(99歳の)誕生日の前、誕生日当日、誕生日の翌日——に分けてみた。その上で、各場面(見開きのページ)の展開を追うかたちで梗概をまとめておくことにする。

誕生日の前

周囲を畑で囲まれた小さな家があった。畑には野菜が植えられていて、家の玄関扉のそばに釣竿と小さな長靴が、その反対側の窓の下に椅子がひとつ置かれている [場面(1)]。

その家に住んでいるのは、98歳のお婆さんと、1匹の元気な牡猫だった [場面(2)]。毎日、猫は帽子をかぶり、長靴を履き、釣竿を持って魚釣りに出かけた。お婆さんを誘う度に「だってわたしは98だもの、98のお婆あさんがさかなつりをしたらにあわないわ」と断られるのが常で、それでも彼は元気よく川へ向かっていく [場面(3)]。

お婆さんは窓の下の椅子に座り、畑で収穫した豆の皮を剥いたり、昼寝をしたりして過ごした。「だってわたしは98だもの」とひとりごちながら。一方、猫は沢山の釣果を得て帰ってくる。「なんておまへはさかなつりがじょうずなんだろう。およいでとるのかい、どこのかわでとるのかい」と、お婆さんからの(釣りの腕前に対する)讃辞と問いかけに対し、彼は「お婆あちゃんもいっしょにすれば、ぼくがさかなをとるところみられるのに」と告げるのだった [場面(4)]。

誕生日当日

99歳の誕生日、お婆さんは朝からケーキづくりに精を出している。猫は彼女がつくるケーキが大好きであった。猫からの(ケーキづくりの腕前に対する)讃辞を受け、彼女は「だってわたしはお婆あちゃんだもの、お婆あちゃんはケーキをつくるのがじょうずなものよ」と答えるのだった [場面(5)]。

お婆さんに頼まれ、猫は誕生日のケーキに立てる^{ろうそく}蝋燭99本を大急ぎで買いに出かける。ケーキが焼きあがると、お婆さんは誕生日用のテーブルクロスの上にナイフとフォークを並べ、お祝いの食卓の準備に取りかかった [場面(6)]。

やがて、猫が大声で泣きながら帰宅する。左手に破れた袋、右手に5本の蝋燭を握りしめていた。どうやら、あんまり急いだせいで、川に蝋燭を落としてしまったらしい。泣きじゃくる猫に向かい、お婆さんは5本の蝋燭をケーキに立てるよう命じたのである [場面(7)]。

ふたりは食卓を囲み、部屋の灯りを消すや蝋燭に火を^{とも}点す。ケーキに立てた蝋燭を数えていると、本当に誕生日を迎えた実感が湧く——そう告げた後、「1さい 2さい 3さい 4さい 5さい。5さいのおたんじょうび おめでとう」と、お婆さんが自分に祝辞を捧げたのに続き、猫も同じ言葉を繰り返した。かくて、数える蝋燭が5本しかなかったため、お婆さんは猫と同じ5歳になり、ふたりで美味しいケーキを堪能した後、眠りに就く [場面(8)]。

誕生日の翌日

翌朝、猫は帽子をかぶり、長靴を履き、釣竿を持って魚釣りの支度をする。いつものようにお婆さんを誘ったところ、この日は「だってわたしは5さいだもの……、あら そうね！ 5さいだから、さかなつりにいくわ」と快諾を得た。お婆さんも帽子をかぶり、長靴を履き、猫と一緒に元気よく川へ出かけていく [場面(9)]。

久しぶりに遠出したお婆さんは、野原の広さや、頬を撫でる優しい風、眼前に咲く沢山の花の姿、風に運ばれる花の香りを満喫する。随分歩いて川に差しかかると、猫は軽々とそれを飛び越えた。猫に促され、「だってわたしは5さいだもの。あら そうね！ 5さいだからわたしもとぶわ」と、お婆さんも彼に続く [場面(10)]。勢いをつけて、ジャンプ。彼女は94年ぶりに川を飛び越えたのである [場面(11)]。

向こう岸をさらに下って、川幅の広い所へ辿り着いた。猫はズボンを脱いで川へ飛び込む。彼に誘われ、「だってわたしは5さいだもの。あら そうね！ わたしもはいるわ」と、お婆さんも長靴を脱いで川に入る [場面(12)]。

スカートが濡れるのを気にして裾をたくし上げると、お婆さんの前掛けの中に魚が1匹入り込んでいた [場面(13)]。さらに、前掛けの紐の両端にそれぞれ1匹ずつ魚が喰いついてぶら下がる。「あら あら あら あら！ わたしなんてさかなつりがじょうずなんだろう」と独りごちつつ、彼女は魚を獲ることに熱中する [場面(14)]。

ふたりは沢山の釣果を得て、家路に着いた。なぜもっと早く5歳にならなかったのかと訝りながら、お婆さんは来年の誕生日にも蠟燭を5本買ってきてほしいと猫に頼む。彼は少し心配そうな面持ちで、「でも、おばあちゃん5さいでもケーキつくるのじょうず？」と尋ねるのだった [場面(15)]。

(2) 教材としての扱われ方

教室の読者たちは、国語科の授業という通常の読書環境とは異なるかたちで『だってだってお婆あさん』に出会う。そこには、こう読み取るべきという方向性が存在するわけだが、たとえ方向づけられた読解であるにせよ、ひとつの作品享受の姿と見なすことは可能であろう。

本作品は、〈すきなところをさがしてよもう〉という単元に位置づけられ、3月上旬の配当(全8時間)である。そして、指導目標、学習活動、評価基準は次のようになっている¹⁾。

【指導目標】

- ◎ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げ、好きなどころを見つけながら読むことができる。
- お話の中で、好きな言葉や文を書き抜くことができる。
- お話の好きなどころを見つけ、紹介し合う。
- ☆ 生活を明るくする態度を育てる題材(道徳)

【学習活動】

①学習の見通しをもつ。

- ・これまでに読んだ作品の中で、どのお話が好きだったかを理由とともに出し合う。
- ・「おはなしをよんで、好きなのところをつたえよう」という学習課題を確認する。
- ・教師が用意したP.123のような好きなところを示した紹介カードを見て、自分たちもカードを書くことを確認する。

②教材文の範読を聞く。

- ・心に残ったところを話し合う。
- ・登場人物を確かめる。

③好きなところを見つけながら、教材文を読む。

- ・P.122の表を参考に、三つの場面に分けて、「おばあさん」の行動を整理する。
- ・表や、誕生日の前後の「おばあさん」と「ねこ」の会話を比べ、「おばあさん」の変化に気づく。
- ・好きなところとその理由をノートにまとめる。

④紹介カードを作る。

- ・お話の好きな場面やおばあさんの好きなところを理由とともに書く。
- ・裏に、選んだ部分を表す絵を描いてもよい。

⑤紹介カードをもとに交流する。

- ・グループやクラスで好きなところを紹介し、感想を述べ合う。
- ・自分と友達では、選んだところや理由が異なっていることに気づく。

⑥学習を振り返る。

- ・お話や登場人物の好きなところを見つけて、紹介することができたかを確認する。

【評価基準】

〔関心・意欲・態度〕

- ・場面の様子や登場人物の好きなところを見つけながら、お話を進んで読もうとしている。

〔読むこと〕

- ・登場人物の行動を中心に好きなところを見つけながら読んでいる。
- ・好きな場面や登場人物の好きなところを書き抜いている。
- ・どうしてその場面が好きか、理由を書いている。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

- ・理由を表す言葉を理解して使っている。

低学年の教材ゆえ、目標と活動に関しては〈好きなところ〉が本作品を授業で扱う際のキーワードのようである。したがって、〈好きなところ〉を見つけ、好きだと感じた理由とともにまとめて（書いて）、さらに、それを紹介・交流し合うという一連の活動が軸になっている。

ともあれ、物語内容の読み取りに関わってくるのは、【学習活動】の③に示された、〈P.122の表を参考に、三つの場面に分けて、「おばあさん」の行動を整理〉し、〈表や、誕生日の前後の「おばあさん」と「ねこ」の会話を比べ、「おばあさん」の変化に気づく〉という作業である。ちなみに、児童たちが目にする教科書の〈学習の手引き〉には、

- ・おばあさんがしたことをかきましょう。
- ・おたんじょう日のまえに、ねこがさかなつりにさそうと、おばあさんは、なんといいましたか。おたんじょう日のつぎの日は、どうでしたか。
- ・「だって だつてのおばあさん」の中で、「いいな」「好きだな」とおもったところがありますか。ノートに かきましょう。そのあとに、おもったわけをかきましょう。

といった指標が示され、ひとつめの指標の後に表が配されている。その表は〈九十九さいのおたんじょう日のまえ／九十九さいのおたんじょう日／おたんじょう日のつぎの日〉という項目だてになっており、〈おたんじょう日のまえ〉の箇所に〈まめのかわをむいたり、おひるねをしたりしました〉という記入例がある。

(3) 授業実践家の言説

小学校の教壇に立つ授業実践家の言説をみても、本作品におけるお婆さんの人物像を捉えるにあたって、前掲の指標が踏まえられていることが確認される。例えば、葛西利伊子²⁾は、次のように述べている。

〈さかなつり〉にさそわれると、〈「だって、わたしは 九十八だもの」〉と断^マります。〈まめのかわを〉むくときも、〈おひるねを〉するときも、やっぱり〈「だって、わたしは 九十八だもの」〉と言います。(中略)自分の年齢を言い訳に、はじめからできないと決めつけていることがわかります。(中略)そんなお婆あさんに大変な出来事が起きます。〈おたんじょう日〉の〈ろうそく〉が、ねこの失敗で五本になってしまったのです。がっかりしつつも〈「五本だって、ないよりましさ」〉〈「わたし、五さいに、なったのよ」〉と、九十九という数にこだわることを捨てています。マイナスをプラスに転じさせることのできるお婆あさんの明るさ、考え方の柔らかさをとらえさせたいと思います。(中略)変わらずくり返されていることは、「だって……もの」という口癖(考え方)です。でも、行動は一変しています。(中略)九十八には似合わないと言っていたことを、〈「五さいだもの」〉と考えることでやってのけるお婆あさん。お婆あさんの前に広がる世界は、より自由で楽しいものになりました。

さらに、大井結厘子³⁾の言を引いておこう。ただし、お婆あさんの台詞における宛て漢字が絵本とも教科書とも異なる点、および〈つり〉〈釣り〉など表記の揺れは原文のままである。

このお話は、小さなうちに住む九十八才のお婆あさんと元気な男の子のねこの物語である。毎日つりに出かけ、お婆あさんも一緒に行こうと誘うねこ。「だって私は九十八才だ

もの。……にあわないわ」と断るおばあさん。そんな日常が、おばあさんの九十九才の誕生日を境に大きく変化する。(中略) 次の日、いつものようにねこがおばあさんをつりに誘うと、「だって、私は五才だもの。あら、そうね。五才だから、魚釣りに行くわ」と今まで断っていた魚釣りに、あっさり行くことになる。このように、誕生日の五本のろうそくをきっかけとして、はっきりと変化するおばあさんの行動は、一年生にも読み取りやすいだろう。後半部分の、五才と思っただけで、生き生きしていくおばあさんの様子を読み取らせることで、やる前から、自分には似合わない決めつけるのではなく、気のもちようで、すてきな体験ができるということを感じ取らせることができるだろう。

また、山本瑠香⁴⁾は、次のように述べている。なお、本稿では、山本が提示した全9時間の授業展開例に含まれる発問と児童反応にも、適宜、触れていく。

九十九歳になるおばあさんと元気な男のねこの二人が繰り広げる、奇想天外な楽しいお話です。消極的だったおばあさんが、ある事件をきっかけにして、ねこと一緒に新しい世界を生きていく、おばあさんの発想の転換が、おもしろく描かれています。(中略) 行動の繰り返しや言い回しの繰り返しのおもしろさはもちろんのこと、繰り返しの中に、「だって～できない」から「だって～できる」への変化が物語の中核になっています。そのことに物語の一層のおもしろさがあることに気づかせていきます。

3人が説く〈自分の年齢を言い訳に、はじめからできないと決めつけている〉、〈やる前から、自分には似合わない決めつける〉、〈消極的〉というお婆さんの当初の姿について、例えば、岡田達信⁵⁾による、次のような説明を挙げておいてもよいだろう。

“セルフイメージ”とは、簡単に言うと「自分に対する思いこみ(自己認識)」です。たとえば「わしはまだ若い」「自分は内気だ」「私は運がよい」「ぼくは几帳面だ」といったように、人は自分のことを言葉で表現します。(中略) 同じ年齢でも「まだ若い」と自己認識している人は、積極的に外にでて活動するかもしれません。一方、「自分は年老いた」というセルフイメージの人は、活動が消極的になってしまいます。(中略)「だって私はおばあちゃんだもの」。このセリフを、もしもあなたにあてはめてみたらどうなるでしょう。「だって私は長男だもの」「だって私は忙しいもの」「だって私はお金がないもの」「だって私は太りやすい体質だもの」だって、だって、だって……。もしかしたらそんな自己認識が行動を制限しているのかもしれません。

そして、おそらくこれらと響き合うものなのだが、福田隆義⁶⁾の言説も、年齢相応たらんとするお婆さんの発話の背後に、本当はまだまだ若々しく振る舞えるという自負を汲み取っている点に留意しておきたい。

猫は毎日、お婆さんを誘い、お婆さんは毎日断りつづけたのだろう。その理由は、98歳のお婆さんに魚釣りは似合わないからだという。「つかれる」とか「おっくう」という理由ではない。自分の年齢で自分を縛っている。だが「だって」といういい方には、年齢に

よる自己規制に反発しているような響きがある。まだまだエネルギーはあるという、お婆さんの思いが伝わってくる。(中略) 豆の皮をむいたり、昼寝をすることが、98歳には似合う、と思いこんでいる。というより、思いこまされているのだろう。だからだろうか、8頁の皮をむいているお婆さんの表情はさえない。どこか不満がありそうだ。思いこみによる、自己疎外といえよう。

このように言いうるとすれば、お婆さんの変化の芽はもともと彼女自身に〈反発〉や〈不満〉というかたちで内在していたものであり、先に引いた3人の授業実践家による、〈マイナスをプラスに転じさせることのできるおばあさんの明るさ、考え方の柔らかさ〉、〈気のもちようで、すてきな体験ができる〉、〈おばあさんの発想の転換〉という把握——いわば、内向きだったエネルギーが外向きに発露した、と見なすところ——へと繋がっていくわけである。

II. 登場人物の変化を捉える

さて、論述の都合上、ここでお婆さんと猫の台詞をすべて拾い上げ、一覧化しておく。通常の丸数字(①・②・③……⑳)はお婆さんの発話を、黒抜き数字(❶・❷・❸……❿)は猫の発話を、それぞれ示すものとする。

誕生日の前

[場面(3)]

❶「おばあちゃんも さかなつりに おいでよ」

①「だってわたしは 98 だもの、98 の おばあさんが さかなつりをしたら にあわないわ」

[場面(4)]

②「だってわたしは 98 だもの」

③「なんて おまえは さかなつりが じょうずなんだろう。およいで とるのかい、どこのかわで とるのかい」

❷「おばあちゃんも いっしょに くれれば、ぼくが さかなをとるところ みられるのに」

誕生日当日

[場面(5)]

❸「おばあちゃん ケーキをつくるの じょうずだね」

④「だってわたしは おばあちゃんだもの、おばあちゃんは ケーキをつくるのが じょうずなものよ」

[場面(6)]

⑤「ろうそくを かってきておくれ。99 ほんだよ。ろうそくを かぞえなくっちゃ ほんとうのおたんじょうびじゃないもの」

⑥「フンフン ケーキは だいせいこう。これは だいせいこうの におい」

[場面(7)]

- ⑦「5ほんだってないよりましさ。さあろうそくをじょうずにケーキにたてておくれ。5ほんだってないよりましさ」

[場面(8)]

- ④「おばあちゃんかぞえて」
- ⑧「1つ 2つ 3つ 4つ 5つ。ろうそくをかぞえると、ほんとうにおたんじょうびのきぶんになるわ」
- ⑨「1さい 2さい 3さい 4さい 5さい。5さいのおたんじょうびおめでとう」
- ⑤「1さい 2さい 3さい 4さい 5さい。5さいのおたんじょうびおめでとう！ おばあちゃんほんとに5さい？」
- ⑩「そうよ、だってちゃんとろうそくが5ほんあるもの。ことしわたし5さいになったのよ」
- ⑥「ぼくとおんなじ！」

誕生日の翌日

[場面(9)]

- ⑦「おばあちゃんもおいでよ」
- ⑪「だってわたしは5さいだもの……、あらそうね！ 5さいだから、さかなつりにいくわ」

[場面(10)]

- ⑫「5さいってなんだかちょうちょみたい」
- ⑧「おばあちゃんもおいでよ」
- ⑬「だってわたしは5さいだもの。あらそうね！ 5さいだからわたしもとぶわ」

[場面(11)]

- ⑭「5さいってなんだかとりみたい」

[場面(12)]

- ⑨「ああ、いいきもち、おばあちゃんもおいでよ」
- ⑮「だってわたしは5さいだもの。あらそうね！ わたしもはいるわ」

[場面(13)]

- ⑯「あら、スカートがぬれるわ」
- ⑰「あらわたし、なんてさかなつりがじょうずなんだろう。5さいってなんだかさかなみたい」

[場面(14)]

- ⑱「あらあらあらあら！ わたしなんてさかなつりがじょうずなんだろう」
- ⑲「5さいってなんだかねこみたい」

[場面(15)]

- ⑩「ねえ、わたし どうして まえから 5 さいに ならなかったのかしら。らいねんのおたんじょうびにも ろうそく 5 ほん かってきておくれ」
- ⑩「でも、おばあちゃん 5 さいでも ケーキ つくるの じょうず？」

(1) 5 歳 (99 歳) のお婆さんの変化を捉える

夙に指摘されているごとく、「だってわたしは……だもの」というのが、お婆さんの口癖である。そして、毎日、猫からの釣りへの誘いを断って玄関扉の横にある椅子に座り、畑で収穫した豆の皮剥きや、昼寝や、時にケーキ作りなどにいそしんで、98 歳という年齢相応たらんとするインドア派であった。

彼女が変わる契機は、これまた多くの指摘の通り、99 本のうち 5 本しかなかった誕生ケーキの蝋燭の件である。誕生日を祝福するふたりの言葉 (⑨および⑤) の前後に、お婆さんによる次のような台詞がちりばめられていた。ちなみに、発話⑩は、猫による「ほんとに 5 さい？」という問いかけに応じたものである。

- ⑤「ろうそくをかぞえなくっちゃ ほんとうの おたんじょうびじゃないもの」
- ⑧「ろうそくをかぞえると、ほんとうに おたんじょうびの きぶんになるわ」
- ⑩「そうよ、だって ちゃんと ろうそくが 5 ほん あるもの」

いま仮に下線を付したが、蝋燭を数えることが〈ほんとうの〉誕生日に為すべきことであり、〈ほんとうに〉誕生日の訪れを実感させてくれる。なぜなら、それは年齢をカウントすることにはかならなかったし、蝋燭の本数が〈ちゃんと〉自分の次なる年齢を証してくれているのだから、と彼女は言う。お婆さんの発話は、蝋燭の本数の確認 (発話⑧「1 つ 2 つ 3 つ 4 つ 5 つ」) から蝋燭の本数への年齢の仮託・投影 (発話⑨「1 さい 2 さい 3 さい 4 さい 5 さい」) へと転化していく。こうして導かれた発話⑩の状況を根拠として、自分を〈ろうそくの数の年〉、すなわち〈5 歳だと思い込んでしまった〉こと⁷⁾ が、物語世界に変化をもたらす発端なのだった。

そんな誕生日を挟んで、【表 1】のような変化が現れた。猫の発話①・⑦はいずれも魚釣りへの勧誘だが、お婆さんの発話①「98 の おばあさんが さかなつりをしたら にあわないわ」は発話⑩「5 さいだから、さかなつりに いくわ」で、真逆のものに転換している。とはいえ、発話③「なんて おまえは さかなつりが じょうずなんだろう。およいで とるのかい、どこのかわで とるのかい」の時点で、既に魚釣りへ興味を示していたことを考え合わせると、発話②について〈実際は、若い人のように色々してみたい気持ちがあるのではないかということ、それを抑えるために、「だって、わたしは九十八だもの」と言っているのではないか〉との指摘⁸⁾ も確かに頷ける。実際のところ、発話⑪・⑬・⑮には行動〈いく〉〈とぶ〉〈はいる〉が付帯しているから、誕生日後のお婆さんは、まさにアウトドア派への転身を遂げたと見えそうだ。

もちろん、「だってわたしは……だもの」という彼女の口癖の部分は、確かに変わらない。

誕生日の前	誕生日の翌日
<p>① 「おばあちゃんも さかなつりに おいでよ」</p> <p>④ 「<u>だってわたしは 98 だもの、98 の おばあさんが さかなつりをしたらにあわないわ</u>」</p> <p>② 「<u>だってわたしは 98 だもの</u>」</p> <p>④ 「<u>だってわたしは おばあちゃんだもの、おばあちゃんは ケーキをつくるのが じょうずなものよ</u>」</p>	<p>⑦ 「おばあちゃんも おいでよ」</p> <p>⑪ 「<u>だってわたしは 5 さいだもの……、<u>あらそうね!</u> 5 さいだから、<u>さかなつりにいくわ</u>」</u></p> <p>⑬ 「<u>だってわたしは 5 さいだもの。<u>あらそうね!</u> 5 さいだからわたしも とぶわ</u>」</p> <p>⑮ 「<u>だってわたしは 5 さいだもの。<u>あらそうね!</u> わたしもはいるわ</u>」</p>

【表 1】 お婆さんの発話における反復と変化

ただ、間に挟み込む言葉が 98 歳（誕生日の翌日ゆえ、正確には 99 歳）ではなく 5 歳となったことで、この口癖の後ろに新たなフレーズ「あら そうね！」が付け加わる。それは自身の変化に対する改めての気づき（自覚・発見）であり、感嘆符が端的に示すごとく、そこに新鮮な驚きを伴う。だからこそ、以降の発話において、

⑩ 「あら、スカートがぬれるわ」

⑪ 「あらわたし、なんて さかなつりが じょうずなんだろう。5 さいって なんだか さかなみたい」

⑬ 「あら あら あら あら! わたしなんて さかなつりが じょうずなんだろう」

と、(いま下線を仮に付したが) 何度も反復される「あら」は、発見の驚きと喜びに満ちている。少し遡ると、発話⑩の後、猫と一緒に魚釣りへ出かけたお婆さんが久しぶりに外の自然を満喫する姿を、物語は次のように描出していた。

のはらは とても ひろくて、やさしい かげが ふいていました。おばあさんは もう ながいこと、こんな とおくまで きたことが ありませんでした。はなが たくさん さいていました。おばあさんは はなの においを くんくん かぎながら、「5 さいって なんだか ちょうちよみたい」

ここでは 5 歳の子どもであることを〈ちょうちよ〉に喩えているわけだが、後に続く場面において、同じような気づきの実感「5 さいって なんだか……みたい」が、これまた口癖のごとく反復されていく。

⑫ 「5 さいって なんだか ちょうちよみたい」

⑭ 「5 さいって なんだか とりみたい」

⑯ 「5 さいって なんだか さかなみたい」

⑰ 「5 さいって なんだか ねこみたい」

いま仮に、彼女がなぞらえた対象に下線を付した。沢山の花が咲きほこる野原をその香りに

包まれつつ彷徨^{ほうこう}したから〈ちょうちょ〉であり、川を飛び越えたから〈とり〉、長靴を脱いで川に入ったから〈さかな〉、川で沢山の魚を獲ったから〈ねこ〉というわけである。

物語の順次性にしがって絵に描かれたお婆さんの姿を見ると、まず、場面(2)・(4)・(5)において、お婆さんの眼は(まるで眠っているような)伏し目がちな様子で描かれている。次に、場面(7)では、失われた蠟燭と泣きじゃくる猫を横目で見ながら困惑した表情になっている。そして、場面(8)・(9)では目元と口元が緩み、笑顔になっている。さらに、場面(12)・(13)・(14)で眼を見開いて驚いたような表情になっているのである。つまり、年齢相応であろうとしていた段階から5歳(の誕生日)を祝福の笑顔で迎えた段階、さらに、そのおかげで様々な発見に遭遇して驚きを感じている段階へと、物語の展開に即応するかたちで絵の中の彼女も変化していくと言えそうだ。

(2) 5歳の猫の変化・成長を捉える

絵本のタイトルが、まさにこのお婆さんのことを指し示しているから、読者はおそらく(暗黙裡に)彼女を主人公として受け入れてしまうはずだ。そして、教科書の読解の指標は、あくまでもお婆さんの変化に着目させるものゆえ、児童たちと共に本作品に向き合う授業実践家たちの言説がそのことを焦点化するのも致し方ないところである。

しかしながら、本作品の主要な登場者がお婆さんと猫だけであることを考えれば、物語のもう一方の当事者(担い手)である猫の変化にも目を向けておく必要があるだろう。家での生活時間を共有していた両者がやがて自然の中での時間も共有し合うようになる物語展開を踏まえると、お婆さんの変化に対置されるかたちでもうひとつの変化が描かれていることを見落としてはなるまい。猫の変化もまた、蠟燭を5本立てた誕生ケーキの件を契機として【表2】のごとき様相で現れてくる。

猫の発話①・⑦は、既に前節で見たように、いずれも魚釣りへの勧誘である。そして、お婆さんが前者に拒絶の返事を、後者に快諾の返事を与えたことも既に見てきた。彼女の変化(快諾と行動化)に伴い、さらなる勧誘の発話「おばあちゃんもおいでよ」が繰り返されることになる。ちなみに、発話⑧は自分と同じように川を飛び越えることを促し、発話⑨は自分と同じように川へ入ることを促すものであった。

まずは、お婆さんの99歳の誕生日前の時点における、猫の姿を捉えておこう。

猫は、毎日、お婆さんを魚釣りに誘うものの、いつも断られていた。〈ねこはそれでもげんきに さかなつりに でかけ)ていく。釣果を見てお婆さんが魚釣りの腕前を褒めてくれたときの発話②からは、魚釣りに自分と一緒に来てほしい、上手に魚釣りをする自分の姿を間近で見てほしいという想いが感じ取れる。にもかかわらず、毎日、誘いを断られてなお、あえて元気な姿で出かける彼なのだ。

誕生日の前	誕生日当日	誕生日の翌日
<p>①「<u>おばあちゃんも</u> さかなつりに <u>おいでよ</u>」</p> <p>②「<u>おばあちゃんも</u> いっしょに <u>くれば</u>、ぼくが さかなをとるところ <u>みられるのに</u>」</p>	<p>③「<u>おばあちゃん</u> <u>ケーキをつくるの</u> <u>じょうずだね</u>」</p> <p>④「<u>おばあちゃん</u> <u>かぞえて</u>」</p> <p>⑤「1さい 2さい 3さい 4さい 5さい。5さいのおたんじょうび おめでとう! おばあちゃん <u>ほんとに5さい?</u>」</p> <p>⑥「<u>ぼくと おなじ!</u>」</p>	<p>⑦「<u>おばあちゃんも</u> <u>おいでよ</u>」</p> <p>⑧「<u>おばあちゃんも</u> <u>おいでよ</u>」</p> <p>⑨「<u>ああ</u>、<u>いいきもち</u>、<u>おばあちゃんも</u> <u>おいでよ</u>」</p> <p>⑩「<u>でも</u>、<u>おばあちゃん</u> <u>5さい</u> <u>いでも</u> <u>ケーキ</u> <u>つくるの</u> <u>じょうず?</u>」</p>

【表2】 猫の発話における反復と変化

景山かれん⁹⁾は、発達心理学でいう5歳児の特徴——〈4歳以下の子どもたちのように、自分の激しい感情を直接おもてに出すことは少なくなって〉くること、〈欲求不満に耐えることや自分の感情をコントロール〉できることなど——を踏まえ、〈五歳である猫は、自分の思い通りにならないこともあると悟っていた。そのため、彼はおばあさんに魚釣りへ来るよう強要できなかったのだ〉と指摘する。自分と一緒に遊びの場に居てほしい、自分の釣りをする姿を見てほしいと切に思いつつ、その気持ちを抑える猫の姿は、98歳だからと自身を抑えるお婆さんの姿と同調している^{シククロ}のである。

無論、5歳児という設定ゆえ、彼がお婆さんのことを大好きであるのは、その態度ににじみ出て来ざるを得ない。〈ねこは おばあさんの つくる ケーキが だいすきでした〉をはじめ、お婆さんの依頼で蝋燭を買いに行く際も〈いそいで いそいで おおいそぎで きました〉と、彼女のために必死な姿が浮かび上がる。蝋燭を落として帰宅した際の描写には、いま仮に下線を施したが、懸命に自分を抑えてきたものの、思わず子どもらしく甘えたい気持ちが溢れ出すさまを見て取ることができよう。

そのとき ねこが おおきな こえで なきながら かえってきました。ねこは ひだりてに やぶれた ふくろと、みぎてに ろうそくを 5ほん もっていました。ねこは あんまり いそいだので、かわの なかに ろうそくを おとして きちゃったのです。 ねこは おばあさんの かおをみて、まえよりも もっと おおきな こえで なきました。

すなわち、お婆さんの依頼をしっかりと果たせなかったがゆえの大泣きであり、それでも、お婆さんの顔を見て安心し、少しほっとして気が緩んだ、という姿である。ここまでは、猫の中に保護を求める子どもらしさを看取しうる。

発話④および発話⑦・⑧・⑨を改めて並べてみると、誕生ケーキに蝋燭を立てて数える場面

から、猫のほうよりお婆さんに行為を促す言葉が連続して発せられていることがわかる。

- ④「おばあちゃん かぞえて」
- ⑦「おばあちゃんも おいでよ」
- ⑧「おばあちゃんも おいでよ」
- ⑨「ああ、いいきもち、おばあちゃんも おいでよ」

発話④と⑦の間には、発話⑧・⑨、発話⑤、発話⑩、発話⑥が織り込まれている。再掲のかたちになるが、引用しておこう。

- ⑧「1つ 2つ 3つ 4つ 5つ。ろうそくをかぞえると、ほんとうにおたんじょうびのきぶんになるわ」
- ⑨「1 さい 2 さい 3 さい 4 さい 5 さい。5 さいのおたんじょうびおめでとう」
- ⑤「1 さい 2 さい 3 さい 4 さい 5 さい。5 さいのおたんじょうびおめでとう！おばあちゃんほんとに5さい？」
- ⑩「そうよ、だってちゃんとろうそくが5ほんあるもの。ことしわたし5さいになったのよ」
- ⑥「ぼくとおんなじ！」

発話④「おばあちゃん かぞえて」の促しの後に配された発話⑤の問いかけと発話⑩の答え、発話⑥の確認を経たことで、先ほど列記した発話⑦・⑧・⑨へと繋がっていく。なぜならば、94年ぶりに5歳となったばかりのお婆さんに対し、5歳を生きている真っ最中の猫は、まさに5歳をエンジョイするためのガイド役であり、領導する立場であるからだ。

そうは言っても、このまま猫がお婆さんの保護者的な立場であり続けるというわけでは、当然ながら、ない。そのことを示すのが、発話⑩「でも、おばあちゃん5さいでも ケーキつくるのじょうず？」である。これは、発話③と対応する台詞なのだが、その直後にお婆さんが発話④「だってわたしは おばあちゃんだもの、おばあちゃんは ケーキをつくるのがじょうずなものよ」で応じていた。〈おばあさんの つくる ケーキが だいすき〉な猫にとって、彼女がこのまま5歳であり続けたらケーキを食べられないのではないか、という子どもらしい不安感の表出した箇所でもある。そんな発話⑩が、ふたりの帰途に着く場面に織り込まれたのは、お婆さんと猫の間の《保護—被保護》の関係が逆転した時間を再びもとの時間に引き戻す役割を担っているのだと言えるだろう。すなわち、ファンタジー的な捉え方をすれば、誕生日の夜に蝋燭を数える場面が逆転の時間への入口であり、本来の現実を再認識する帰途の場面が、もとの時間への出口であったと捉えられるわけである。

結

小学校の教室においては、本作品に描かれたお婆さんの変化に着目して読み取りが進められてきていた。だが、さらにもうひとりの主要な登場者である猫の変化に着目することで、この

絵本がお婆さんの変化の物語であると同時に、猫の変化・成長の物語でもあることが確認されたはずだ。とはいえ、着目すべき点をここまで指摘してきたわけであるが、いまに至ってなお、私の中でじっくり来ない点が残っている。確かに、私自身も初読の段階では、解き放たれたお婆さんの心の羽ばたきのようなものが迫ってくると捉え、感動を抱いた。しかしながら、授業実践家たちが指摘するように、自身を呪縛するものからの解放は、果たしてお婆さんが自力で成し遂げたものだったのだろうか。

ある曜日の、ある時間帯に、あるスーパーで出会うお婆さんたちの姿を私はふと想起する。レジに並んでいる家人の後ろに着くために、人が多く立ち並ぶ列の隙間のない側から一生懸命割って入ろうとしていたお婆さんの姿。あるいは、レジの列に並んでいた私の背後から「ああっ！」という声が聞こえ、振り返ると買い物カゴの中でパック入りプチトマトをひっくり返してしまっていたお婆さん。「大丈夫ですか？」と問いかけると、子どものように楽しそうに「ハハハッ」と高らかに笑うのだった。さらに私事に及ぶが、認知症を患い、同じような問いかけを何度も繰り返し、他意のない笑顔を向け、時に知らない小父さん（私である）を見て、子どものように警戒するわが母の姿を想起する。

私はこう思っている。すなわち、お婆さんは、98歳であることには自覚的ではあったろうが、自らの前向きな意志によって〈自分を解き放ち〉、5歳たることを選択したわけではなかったのではないか、と。

本作品の作者である佐野洋子は2010年に逝去している。彼女の死を報じる記事¹⁰⁾を目にして、やはり少し気になることがあった。

三重県四日市市の子どもの本専門店「メリーゴーランド」の店主、増田喜昭さん(60)は30年来のつきあい。佐野さんを招いて映画評論家のおすぎさんとの対談も企画した。『洋子ちゃん』という子どもを自分の中に抱え、本音を大事にした。みんなと仲良くしておけば、という場面でも、引かなかった。自分がかつて子どもだったときの感覚を忘れた人です」

物忘れが激しくなったり、韓流ドラマにはまったり、老いの日常をありのままにつづったエッセーでも読む人の心をつかんだ佐野さん。エッセイストの酒井順子さん(44)は、「いくつになっても前向きで、という風潮が強いなか、全編にわたって心身の不調を訴えた後ろ向きのエッセーを^{そうかい}読むと、かえって爽快な力強さを感じた」という。

「老いても生き生きしなくてはいけない、と焦らせるのではなく、ごはんを食べて寝て起きてさえいれば、どうにかなる、と教えてくれる佐野さんのエッセーを、もっと読んでいたかったです」(佐々波幸子)

いま下線を仮に施したが、これは彼女の絵本についてではなく彼女の随筆に対する個人の感想が記された箇所である。とはいえ、「いくつになっても前向き」で「老いても生き生きしなくてはいけない、と焦らせるのではなく」といった言説は、『だってだってのおばあさん』を

教室の児童たちに読ませたいと考える方向性とは真逆のものに他ならない。

そこで、彼女の随筆をいくつか繙いていて、次のようなものを見つけた。なお、認知症に対する呼称が旧来のものであり、いまでは不適切とされるところだが、資料としての利用であることに鑑み、そのまま引用しておくことにする。やや長きに及ぶが、63歳の佐野と88歳の母親のエピソードから綴り始められたこの随筆¹¹⁾は、『だってだってのおばあさん』の世界と微妙に響き合う。ただし、絵本との出会いに際して、(作家自身の人生や伝記的な事実と重ね合わせつつ読むのではなく)作品世界そのものと向き合えばよいというのが、私の基本的な立場である。にもかかわらず、ここでは最後の提言のために(常とは異なるかたちで)あえて作家の人生を参照することとした。

八十八歳の痴呆の人が聞く。「あの失礼ですけどお幾つでいらっしゃいますか」。痴呆でも「失礼ですけど」と云うんだと感心しながら「はい、六十三ですよ」と答える。答えても無駄なんだよなあと思ったとたん「あの失礼ですけどお幾つでいらっしゃいますか」「六十三です」「あーあー六十三、そうですか、あの失礼ですけどお幾つ?」。自分で何回も「六十三」「六十三」と発音するのにくたびれて「お母さん。わたしや六十三だよ」とすごんだ声になる。何回も同じことをくり返すのにいらつきもするが、自分が六十三という事にだんだん驚いて来る。

まさか私が六十三? 当たり前で何の不思議もないのに、どこかに、えっまさか嘘だよなあと思うのが不思議である。「お母さんはおいくつになられました?」「私、えっ私、そうねえー四歳ぐらいかしら」。昨日入れ歯が神かくしにあった様に消えてしまった。上の入れ歯を外した人は皆異様な人相になる。上唇が下唇にめり込まれて、口の中心であつたらしい凹んだところから強いしわが放射線状に散っている。おしりの穴みたい。

ついに四歳!!

いつか四十二歳と答えられて、ショックを受けたが、大笑いもしたのだ。意地悪く私は云った。「そうか、私、母さんより年寄りになったんだ」。あの時はまだ私の名前を時たま口にしていた。私が子である事が時々はわかっていた。あの時母は明らかに混乱した。あの時から私は母に年齢を確認させる事をやめた。私がどこかの「奥様」であろうと、「そちらさま」であろうと、この人の中で私はどこかで動かぬ子として存在していると感じる。四歳。今日私は笑わず、しわくちゃの四歳を見て「ふーん」と思う。そういう事なんだよなあ、四歳。(中略)

あの時私はおばあさんは生れつきおばあさんだと思っていた。あのおばあさんもかつてプリプリの小さな手をしていた子供の時代があったなどと思ひもしなかった。子供の私はおばあさんが八十なのか六十なのか知ろうともしなかった。八十でも六十でも同じおばあさんだった。今幼稚園の子供は私のことをそう思っているだろう。(中略)

鏡を見て、「ウソ、これ私?」とギョッとする瞬間以外、一人でいる時、私はいったい

いくつのつもりでいるのだろう。青い空に白い雲が流れて行くのを見ると、子供の時と同じに世界は私と共にある。六十であろうと四歳であろうと「私」が空を見ているだけである。突然くもの巣が顔にはりついたりする時の驚きは、七歳も四十歳も今でも同じでただ私が驚いている。

こうしてみると、『だってだってのおばあさん』に登場するお婆さんは、佐野洋子の母親であると同時に彼女自身であり、猫もまた同時に彼女の分身であることが知れよう。同絵本の中でお婆さんが変化することになる誕生日の記述に、私は引っかけりを感じた箇所がある。

ねこはお婆あさんのかおをみて、まえよりももっと おおきな こえで なきました。お婆あさんは がっかりしました。

「5ほんだってないよりましさ。さあろうそくをじょうずにケーキにたてておくれ。5本だってないよりましさ」

猫を慰め、自身も気を取り直そうとする場面と見なされるところだが、いま仮に下線を施した箇所からは、5歳児への慰めというよりもむしろ、彼女の落胆の大きさ（および自身への慰め）が看取されよう。

ある種の自己確認の儀式のように、98歳まで習慣化してきた蠟燭のカウント。「だってわたしは……」を裏打ちするものでもあっただけに、それがアクシデントによるものとはいえ、崩壊の危機を迎えたのだから。すなわち、それは、彼女が〈前向きに発想を転換した〉とか〈気のもちようをかえた〉とかいう問題ではなかった。先ほど引用した随筆に登場する母親のごとく、ここからの彼女は、ごく自然の成り行きで5歳になってしまったのだ。

そして、この箇所以後、お婆さんによる同内容の発話の反復が増えている点や（既に指摘したごとく）猫が彼女に指示を与えて行動を促すようになっている点を考え合わせると、お婆さんの変化と猫の変化・成長を捉えることの意味は、読者である児童たちにとって、身近な高齢者に対する向き合い方——ひいては、老いの受けとめ方——を感得するところに繋がるのではないかと考えている¹²⁾。

都市化や核家族化の進行する現代社会において、生（出産）・老・病・死が我々の日常生活から隔離（外部化）され、子どもが高齢者と触れ合う機会も少なくなり、世代間の交流が乏しいことの指摘は多くなされている。無論、絵本は実務マニュアルではないから、具体的な方略を示すものではない。それでも、いたずらに老人を忌避したり、自分の老いを忌まわしいものとして否定するのではなく、それが若き自身の将来の姿でもあるということの自覚は、おそらく老幼の関わりを育てる中で——あるいは、その素地を育てる中で——生まれてくるはずのものなのである。

※ 本稿における物語本文の引用は、絵本『だってだってのおばあさん』（フレーベル館、2009年）に拠るが、丸数字や下線などは全て引用者が私に付したものである。

注

- 1) 学習目標および学習活動などは、光村図書のウェブサイト公開されている〈平成27年度用・小学校国語・年間指導計画・評価計画資料〉による(2015年5月17日参照)。
http://www.mitsumura-tosho.co.jp/kyokasho/s_kokugo/keikaku/
- 2) 葛西利伊子『だって だっての おばあさん』(さの ようこ)(西郷竹彦監修『ものの見方・考え方を育てる小学校一学年・国語の授業』、新読書社、2011年)、pp.155-157。
- 3) 大井結厘子「だって だってのおばあさん」(筑波大学附属小学校国語研究部編『板書でわかる国語 教科書新教材の授業プラン 小学校1年』、東洋館出版社、2011年)、p.60。
- 4) 山本瑠香「だって だってのおばあさん」(今井成司・林真由美・山本瑠香編『1年生国語——教科書教材の読みを深める言語活動 発問を中心とした全時間の展開例』、本の泉社、2014年)、p.67。
- 5) 岡田達信『大人のための絵本セラピー 絵本はこころの処方箋』(瑞雲舎、2011年)、pp.12-15。
- 6) 福田隆義「佐野洋子絵・作『だって だってのおばあさん』を読む」(『文学と教育』第169号、1995年6月)、pp.7-8。
- 7) 前掲書(注4)、p.77。
- 8) 前掲書(注4)、p.73。
- 9) 景山かれん「教材分析(低学年) だって だってのおばあさん(さのようこ)」(『物語・教材分析と創作』第4集、太陽書房、2015年4月)、pp.53-54。
- 10) Asahi.com 2010年11月10日記事「大人の心、本音で揺さぶる絵本作家・佐野洋子さんを悼む」による(2015年5月17日参照)。
<http://book.asahi.com/clip/TKY201011100226.html>
- 11) 佐野洋子「これはパテンか?」(佐野洋子『神も仏もありませぬ』筑摩書房、2003年)、pp.3-9。
- 12) 例えば、就学前の教育においても、『幼稚園教育要領』の〈人間関係〉領域の〈内容〉に〈高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ〉とあり、その〈内容の取扱い〉について〈高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみをもち、人とかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親や祖父母などの家族の愛情に気づき、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにすること〉とある。また、『小学校学習指導要領』の〈道徳〉の第1学年及び第2学年の〈内容〉のうち、〈主として他の人とかかわりに関すること〉のひとつとして、〈幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする〉というものがあげられている。

***"Datte datte no Obah-san"*(written by Yoko SANO)
as the educational-material
for Japanese language art education**

Koji SHIRASE

Department of Education and Psychology,

Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

No English abstract